

自然物由来の日本画顔料 -生命を描くということ-

町田藻映子（京都大学大学院理学研究科植物系統分類学研究室 研究生）

はじめに

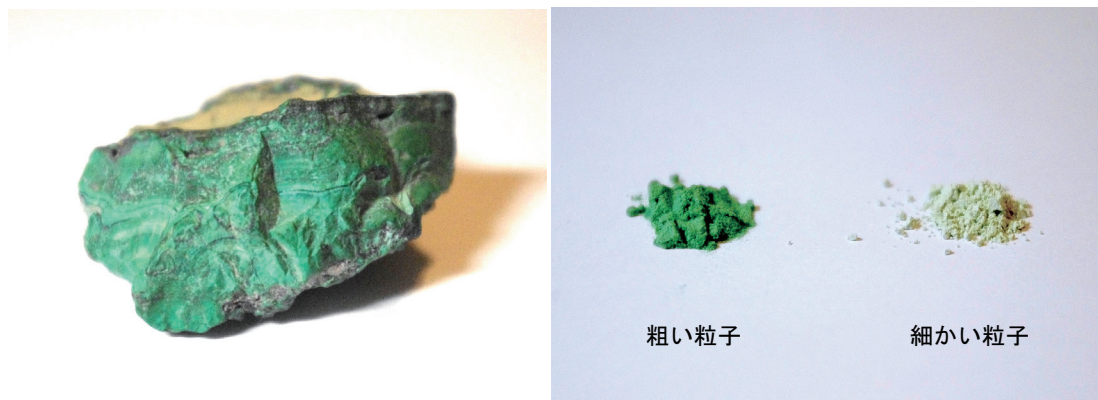
日本画とは、岩絵具（いわえのぐ）という画材を使って書かれている絵画です。岩絵具は、明治時代に油絵が日本に入ってくるよりもずっと昔から日本で使われてきた画材で、もともとは大陸から伝わったものでした。明治以降、西洋から入ってきた油絵と区別するために、それまで日本で描かれていた絵画（岩絵具を使った絵画）を“日本画”と呼ぶようになりました。現在では、岩絵具を扱うための技法も多岐にわたり、作家さん一人ひとりが独特の表現技法を用いて絵画を描いています。

日本画画材の最たる特徴は、すべて自然物からできていることにあります。今回はその原材料や、それを扱う作家の独特な感覚について、私の制作のお話を交えながら、少しだけ紹介をさせていただきます。

日本画の画材について

日本画で使われている岩絵具とは、孔雀石や藍銅鉱など色のある鉱物を砕いて粉状にしたものです。これらの鉱物は宝石としても扱われるものなので、絵の具は昔から非常に貴重なものでした。また、鉱物以外にも、珊瑚、貝、虫や植物染料から作られている絵の具もあります。ベンガラなどは、酸化鉄を含んだ土そのものが絵の具になっています。

一種類の鉱物からは約10～15種類の絵の具が作られます。色の違いは粒子の大きさで決まり、粒子が荒いと、濃く鮮やかな色になります。粒子が細くなると、色は白っぽく淡くなっていきます。



孔雀石 緑青（りよくしょう）という絵の具になる



藍銅鉱 群青という絵の具になる

粒膠

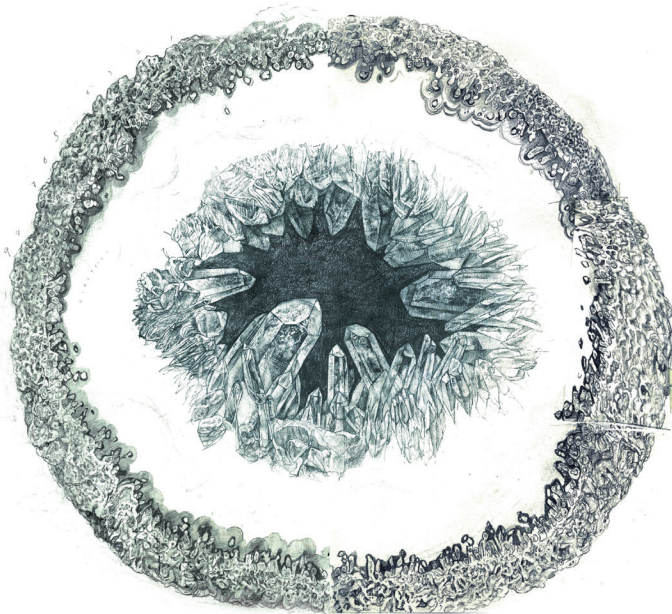
日本画の絵の具は粒状なので、紙に絵の具を定着させるために、膠（にかわ）という定着材を用います。膠とは、牛や鹿などの動物の皮を煮詰めて出てきたコラーゲンです。ゼラチン板のように乾燥させて保存できるようにしてあります。使うときは、水で液体状に戻します。生ものなので、一度水に戻したら、保管時は要冷蔵。長くても一週間が使用期限です。

このように、日本画の画材は、自然界に存在するあらゆるものが原材料になっています。“岩絵具”とひとまとめに呼ばれていますが、色ごとに原材料が異なるので、海外では岩絵具を使った絵画は“mixed-media（複合素材）”と表記されることもあります。日本画画材に接していると、ずっと昔の人々は、自然の中で色になるものは何でも利用したのだということを実感できるように思います。実は運動場の砂などでも、きちんと精製すれば絵の具として利用できるものになるのです。

日本画の制作過程

※古典絵画の模写ではないので、制作方法は作家によって異なる場合があります。

絵画制作の基本的な手順として、まず初めに、モチーフを見て写生（スケッチ）を行います。写生は、「生を写す」というように、対象の本質がいかなるものかを知るための大変重要な作業です。例えば、モチーフが花であれば、「花を花として成立させているもの・こと」を理解していくための作業になります。写生は、絵を作るための情報集めのようなものです。



鉱物の写生



植物の写生

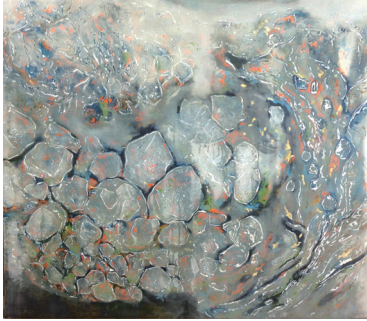
私にとっては、そのような制作過程が非常に面白く感じられ、生物というものの本質を追求すること自体が制作のテーマになる最初のきっかけとなりました。

写生が済んだら、絵画を描くために、絵の具の使用手順を考えます。

岩絵具を使うときは、基本的に粒子の粗いものを最初に塗り、徐々に細かい粒子の絵の具を上重ねて塗ってゆきます。そうすることで粗い粒子の間に細かい粒子が入り込み、画面に絵の具がしっかり定着し、発色も綺麗になります。また、粒子と粒子の間から、下に塗った色がわずかに見え隠れすることで、独特の深い色味が表現できます。

その効果を出すために、最初に下地に塗る絵の具、途中で使う絵の具、仕上げに使う絵の具を、ある程度計画を立てることが必要になります。

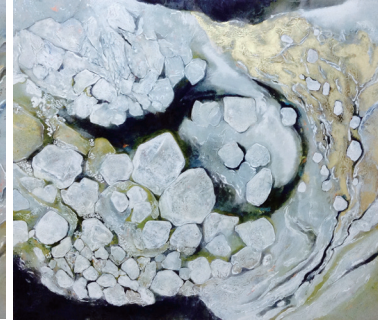
制作過程から完成まで



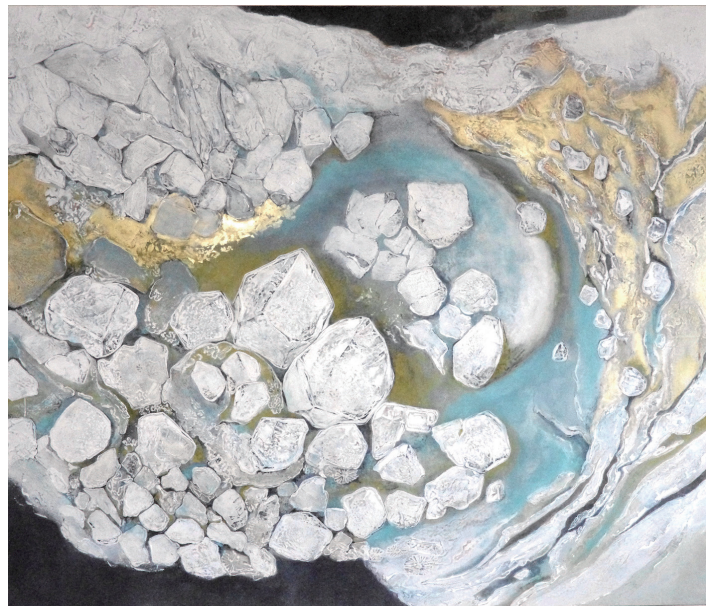
過程 1



過程 2



過程 3



完成

さいごに——日本画画材に見る人間と自然の関係性

この絵の具は自然物であるだけに、どうしても思い通りにいかないことが多くあります。

膠は、夏にはすぐに腐ってしまいます。冬には温度が低いと、作業中でもすぐにゲル状に固まってしまいます。また、水との配合を間違えると、塗った絵の具がうまく定着しなかったり、厚塗りした部分にヒビが入ってしまったりします。膠が強すぎると、数年経って絵画にカビが生えてしまうこともあります。また、細かい粒子の絵の具は、膠と均一に混ぜることが難しく、丁寧に少しずつ指で溶いていかなくてはなりません。時には、一色を用意するのに30分かかることもあります。このように作業効率は決して良いわけではありません。

しかし、絵の具を溶くだけの長い時間は、自分のやっていたことからいったん離れ、自らに対して冷静になれる貴重な時間でもあります。また、自分の都合で力づくに独りよがりによがるのではなく、画材にきちんと耳を傾けることで、必ず他には代え難い深みのある表現が生まれます。

人間の生活において、自然と共存していくことは、時に難しく大変厳しいものではありません。しかし、自然の声を無視せず、きちんと耳を傾けることで、私たちは大変ありがたい恩恵を受けることもできる。自然物由来の日本画の画材を扱っていると、そのような人間と自然との関係性をも改めて実感することができるように思います。